

知床半島ヒグマ管理

計画とは

知床に生息するヒグマを適切に管理するため、関係行政機関は「知床半島ヒグマ管理計画」を定めています。

管理計画では、地域住民の生活や産業を守りながら、利用者の安全と良質な自然体験の場を確保します。



活動レポート 文・調査研究室 梅村佳寛

知床半島に生息するヒグマの数とマネジメントの今後



正確なヒグマの個体数を調べる

知床半島のヒグマが絶滅することがないよう、管理計画ではメスヒグマの人為的な死亡数に上限の目安を設けています。「人為的な死亡」とは、狩猟や有害捕獲、交通事故などのことをいいます。

第1期の管理計画では、5年間（2017～2021年）におけるメスヒグマの人為的な死亡数の総数の目安を75頭、年間で15頭以下としていました。ただし、この数値は知床半島に何頭のヒグマが生息しているか、その実態がよく分からぬ状態で定められた頭数でした。当時の個体数推定は、知床に「約100～1000頭」のヒグマが生息しているという、極めて曖昧なものだったのです。

被害を出して有害捕獲された個体には、大型のオス成獣も複数含まれています。オス成獣は一般に警戒心が強く、建物に突如侵入したことはあまり考えられません。

羅臼町では市街地への侵入や水産加工物への加害です。特に2021年は羅臼町で干し魚を保管する倉庫内等にヒグマが侵入する被害が相次ぎ、人とヒグマのあつきが深刻化しました。

これらのヒグマは、屋外に干されていた魚や水産加工物の残滓等を口にして、人為的な食べものに執着した結果、人にに対する警戒心が薄れ、行動が大胆になり、被害をもたらすクマに変貌した可能性が高いと考えられます。

2019年の推定生息数は、中央値が472頭（推定幅：393～550頭）、2020年の推定生息数は中央値が399頭（推定幅：342～457頭）となりました。

つまり、知床にはヒグマが「400～500頭」生息しているということが確信をもつて言える状況になつたのです。



ヒグマの毛からDNAを解析するヘアトラップ調査



詳しい調査方法はこちでご紹介しています。
SEEDS No.245
『知床半島にヒグマは何頭生息しているのか？』

増加傾向にあり、ヒグマ対策のコストや、ヒグマによる地域住民などへの潜在的リスク、生活環境被害も増加しています。斜里町と羅臼町におけるヒグマの一年間の有害捕獲数は、ここ20年間で約4倍に増加しています。

一方、知床半島でのヒグマの有害捕獲数（図1）は、有害捕獲の主要因は、斜里町では農作物への加害、

※環境省・林野庁、北海道、斜里町、羅臼町、標津町
合推進費（公募型研究予算）平成19年度
「遺産価値向上に向けた知床半島における大型哺乳類の保全管理手法の開発」。北海道大学・道総研・知床財団・東京農工大学が協同で実施。

つ、ヒグマの個体群を存続させること（絶滅させないと）を目的に計画が策定されています。



羅臼町の住宅地に侵入したオス成獣の足跡



斜里町農地のビート被害



国立公園内の利用者とのあつれき「クマ渋滞」

第2期 知床半島

ヒグマ管理計画

上限頭数は

捕殺目標ではない

大規模DNA調査と過去のデータをもとに、知床世界自然遺産地域科学委員会「エゾシカ・ヒグマワーキンググループ会議」によって、ヒグマ管理計画の改定作業が行われました。過去のヒグマ生息数の増減をシミュレーションした結果、2010年まではヒグマの個体数が増加しているものの、その後はほぼ横ばい状態を保つてることがわかりました。

精度の高い個体数推定が実現し、生息数の将来予測が可能になったこと、人とヒグマのあつれきが増大していることなどを鑑み、「第2期知床半島ヒグマ管理計画」では、メスの人為的死亡数の上限目安を6年間で108頭（年間18頭）とすることが決まりました。

年間18頭というメスヒグマの人为的死亡数は、あくまで上限の目安であり、人とのあつれきを低減しつつ、ヒグマの個体群を持続可能な状態に維持するための目安です。

メスの人为的死亡数が年間18頭で推移した場合、2027年にはヒグマの生息数が2020年の水準より14%程度減少すると考えられています。しかしながら、ヒグマは知床の自然の水準であっても知床半島のヒグマの絶滅確率は0%であると考えられています。

ヒグマの現状に合わせて人間側も対応を変えなければ、あつれきはより深刻化すると考えられます。ヒグマに対する行政や、現場を担う知床財団、地域住民は今後、中長期的な視点に立ってヒグマとの向き合い方を策定する必要があります。

ヒグマの現状に合わせて人間側も対応を変えなければ、あつれきはより深刻化すると考えられます。ヒグマに対する行政や、現場を担う知床財団、地域住民は今後、中長期的な視点に立ってヒグマとの向き合い方を策定する必要があります。

は増えすぎだ、数を減らせることが期待されます。

被害の現場では、「ヒグマは増えすぎだ、数を減らせる」という意見をしばしば聞きます。

しかし、水産加工物の管理不徹底や生ゴミの投棄といった人間側の問題行動が改善されなければ、被害の軽減は達成されないでしょう。

ヒグマは知床の自然の豊かさを象徴する大型哺乳類であり、観光資源として必要とされています。

知床半島内でもエリアによつて人間の活動が一様ではありません。遺産地域などの保護区、農地や漁業活動の拠点、市街地といったように、場所ごとにあつれきの内容も程度も異なります。

長年に渡り実態がよく分からなかつたヒグマの個体数が明らかとなつた今、ヒグマのマネジメントについて

の役割を担っています。し

かし、熟練ハンターの高齢化が進み、銃によるヒグマの捕獲経験者が減少すること

とで、地域住民の速やかな安全確保が難しくなること

も懸念されます。市街地や被害が深刻化している農地

での適切な捕獲体制の維持と、被害を予防するための

人間側の行動改善、この二軸が今後のヒグマのマネジメントでは欠かせないものとなるかもしれません。

時代と共に人間社会の情勢が変化してきたように、ヒグマの生息状況も一定ではありません。変化するヒグマの現状に合わせて人間側も対応を変えなければ、あつれきはより深刻化する



「第2期知床半島ヒグマ管理計画」
の全文はこちらから読むことができます。



知床の未来を担う子どもたちに向けて毎年行っているヒグマ授業